

研究ノート

心霊主義者としてのコナン・ドイル 一作品『霧の国』を中心に—

松下 周平*

はじめに

英国の作家アーサー・コナン・ドイル (Arthur Conan Doyle : 1859~1930) は、シャーロック・ホームズを主人公とする推理小説でよく知られる。その一方で、彼は SF 小説も手掛けている。

なかでも、振る舞いは乱暴だが、その頭脳は世界一と称される動物学者チャレンジャー教授が恐竜の現存説を唱え、アマゾンの奥地へ旅立つ冒険 SF 小説『失われた世界』は、1912 年に発表されると大変な人気を博した。作者のドイル自身もこの作品を気に入っていたという。これはチャレンジャーシリーズとして知られる一連の作品の第 1 作目である。その翌年には生物の滅亡を描いた『毒ガス帶』をこのシリーズとして世に送り出した。

ところがシリーズ 3 作目の『霧の国』は出版までにしばらく間が空き、1925 年に連載が開始された。その内容は死後の世界や魂の存在を信じる思想、心霊主義を扱う物語であり、SF 小説としては疑問を抱くものであった。心霊主義という思想はドイルの創作ではなく、実際に当時の西欧社会に存在していたものであった。この思想の特徴は、死後の世界や魂の存在の根拠となる様々な心霊現象に対し、科学者の中にはその実在を認める者がいたという点にある。こうした心霊主義を題材とした『霧の国』がシリーズの 3 作目として世に出されるまでの 12 年間に、ドイル自身に大きな変化が生じている。それは、ドイルが第一次世界大戦の最中の 1916 年に心霊主義を信じることを表明したことである。その後、ドイルは心霊主義の布教に全精力を傾けるようになる。『霧の国』はこうした心霊主義者ドイルの手によりチャレンジャーシリーズの一つとして書かれた作品である。

シリーズを通じて比較すると、『霧の国』には様々な矛盾点、相違点が存在している。本稿ではシリーズとしては逸脱していくながら、なぜチャレンジャーを中心とし

* 東海大学文学部ヨーロッパ文明学科

た物語として『霧の国』を書いたのか、そのドイルの意図を探ることを目的とする。作品を論じていくにあたり、背景として第1章で心霊主義の歴史の概観、第2章でドイルの生涯と心霊主義との関わりを見していく。第3章では『失われた世界』から始まるチャレンジャーシリーズのいきさつと『霧の国』のあらすじを、そして第4章で『霧の国』に込められたドイルの意図を考察し、上の問題に対する一つの答えを見出すことを試みる。

第1章 心霊主義の歴史

心霊主義の思想には二大原則と呼ばれるものがあり、ひとつが「人間の個性は死後も存続する」、ふたつ目が「この世とあの世とは交信可能である」というものである。この二点を認める者が心霊主義者とされている¹。

心霊主義の発端となったのは、1848年にアメリカのニューヨーク州、ハイズヴィル村のフォックス家で起きた事件で、「ハイズヴィル事件」と呼ばれている。フォックス家で壁や天井を叩く音、ラップ音が響きはじめ、一家や村の人々はそのラップ音を鳴らす行商人の幽霊と対話を行った。ハイズヴィル事件最大の特徴はこの死者との交信であるとされている。事件後、フォックス家の娘たちは心霊現象を起こす存在、靈媒として現象のデモンストレーションや死者からのメッセージを伝える講演を行う。また、フォックス姉妹以外にもラップ現象を生じさせる靈媒が多数出現し、心霊主義は法律家や政治家、大学教授、新聞記者などの共感を集め、アメリカで一大ブームとなつた²。

1852年、サイコメトリリスト³として著名であったアメリカの靈媒ハイデン夫人がイギリスへ渡ったことで、イギリスへ心霊主義が取り入れられる。その後、強力な靈能力を持つとされていた靈媒ダニエル・ダングラス・ホームの渡英により、イギリスでの心霊主義の熱狂が高まった。ホームは空中を浮遊するなどの驚くべき行為で人々の注目を集めたとされている⁴。

こうした心霊現象は実験を重要視する当時のイギリスの科学と結びつき、科学者たちによる心霊研究が始まった。その第一人者として、ウォレス (Alfred Russel Wallace : 1823~1913) が挙げられる。ダーウィン (Charles R. Darwin : 1809~1882) と自然淘汰説を共同発見した生物学者である。

ウォレスは心霊主義に出会う前、靈や神などといった存在を認めない唯物論者であった。しかし 1865 年、ウォレスは友人の家で行われた心霊現象の実験会に参加し、

ひとりでにテーブルが動く現象を目撃する。それをきっかけに探究心に火が付き、心霊研究を始める。調査すればするほど、現象の実在を認めざるをえなくなった⁵。1869年、ウォレスの所属する学術団体ロンドン・ダイアレクティカル・ソサイエティが心霊現象の調査を行う委員会を発足した。委員会はラップ音や物体の移動、自動書記による通信などの現象を調査し、その実在を認める報告書を出版した⁶。

その後、クルックス(William Crookes : 1832~1919)による心霊研究が始まった。タリウム元素の発見者として名を挙げていたクルックスは、1870年に心霊研究を行う声明文を発表した。「スピリチュアリズムの愚にもつかない現象を、魔術と魔法のはきだめに放り込んでしまう学者が続出するだろう」⁷という懐疑的な一文で締めくくられたこの声明文は、心霊主義否定論者から大歓迎を受けた。クルックスはホームを研究対象とし、手を触れずにアコーディオンを演奏できるかどうか、離れた物体の重量が変化するかどうかを調査した。当時の調査報告書によると、ホームは手を触れずアコーディオンを演奏し、離れた物体につながれた秤の目盛りを、上にも下にも動かした。こうした現象を目の当たりにし、クルックスは心霊現象の存在を認める。この実験から、クルックスは物理学の範疇に入らない新しい力があると考え、心霊現象を引き起こす力を *Psychic Force* と名付けた⁸。これは物理学者が心霊現象を引き起こす力に与えた最初の定義と言える。その後、靈媒フローレンス・クックの起こす完全物質化現象、すなわちケイティ・キングと呼ばれた死者の靈を生前と変わらぬ姿で出現させる現象を調査し、この場合も現象を肯定する報告書を発表している。報告書の中でクルックスはケイティの写真を 44 枚撮った（写真はクルックスの死後公表された）、ケイティの脈拍を計ったところ 75 であった、と述べており、このケイティ・キングに関する現象は今でも議論的となっている⁹。

1882年、著名な学者や社会の名士を集めて研究会を作れば心霊研究は世間の承認を得ることができる、という物理学者バレット(William Fletcher Barrett : 1844~1925)の考えのもと、ケンブリッジ大学の倫理学教授シジウィック(Henry Sidgwick : 1838~1900)を初代会長とし、世界初の心霊研究機関である Society for Psychical Research、通称 SPR が設立される¹⁰。

その後も SPR を中心とした心霊研究は続き、心霊現象の実在は活発に議論されていた。

第2章 コナン・ドイルと心霊主義

1. コナン・ドイルの生涯

1859年5月22日、アーサー・コナン・ドイルはイングランドのエдинバラに生まれる¹¹。アイルランドに由来する伝統あるカトリックの家に生まれたドイルは、1868年にはイエズス会のストニーハーストカレッジの予備校ホッター学院に、1871年にはストニーハーストカレッジに入学し、古典や数学を学び、宗教教育を受けた。1875年から1年間オーストリアのフェルトキヒの学校へ留学した後、1876年、医者を志しエディンバラ大学の医学部に入学する。

エディンバラ大学でドイルは多くの個性的な教授と出会っている。中でもジョセフ・ベル教授¹²、ラザフォード教授¹³は後の作家としてのドイルに大きな影響を与えた。ベル教授は一目見ただけで患者の職業や経歴、病状をぴたりと言い当てた。後にドイルはこの鋭い観察眼を持ったベル教授をモデルに、シャーロック・ホームズを生み出した¹⁴。もう一人のラザフォード教授は、ドイルがチャレンジャー教授を書く際のモデルとしている。ずんぐりとした体型にあごひげをたくわえ、並外れた大きさの声で講義を行うさまは、ドイル達学生を魅了し、畏敬の念を抱かせた¹⁵。

家計を助けるため、ドイルは医者の助手のアルバイトに精を出していた。1879年、友人のすすめもあり、短編小説『ササッサ谷の秘密』を書き上げ、月刊誌チェンバーズ・ジャーナルに投稿し、採用された。原稿料を貰い、自信のついたドイルはその後も内職として短編小説を書き、投稿を繰り返していた。1881年に医学の学位を取得し、1882年に大学の友人とプリマスで医院を開業するが、喧嘩別れをし、その後サウスシーで個人の医院を開業することとなった。

ある時、ドイルはジャック・ホーキンズという脳膜炎を患った少年を自身の医院に入院させた。少年の母親、エミリー・ホーキンズが自分たちにはお金がなく、ジャックの症状を知つて置いてくれるホテルはどこにもないと訴えたからである。ジャックの姉、ルイズ・ホーキンズと交代で看病にあたつたが、程なくしてジャックは亡くなつた。弟を亡くしたルイズと、自身の医院から死者を出したドイルはお互いを慰め合い、いつしかその感情は愛情に変わつた。1885年、ドイルはルイズ・ホーキンズと結婚する。

医院を経営しながらも執筆活動は続けており、1887年にはシャーロック・ホームズの第1作『緋色の研究』が発表された。しかしこの最初のホームズはたいした評判を呼ばなかつた。ドイルの作家としての名声が高まつたのは、1889年に発表された『マイカ・クラーク』である。17世紀末のイギリスを舞台にしたこの歴史小説は

批評家から称賛され、ドイルを非常に勇気づけた。翌年には百年戦争を舞台にした『白衣団』が当時の一流月刊誌『コーンヒル』に連載され、ドイルは歴史小説こそ自分の天分であると思うようになった。

一方で、本職である医者としてのドイルはいつまでもサウスシーにいては大成しないと考え、ウィーンに赴き眼科の研修を受けた。その後、1891年にロンドンで眼科専門医として開業するが、全く流行らなかった。そのため、ドイルは医者をやめて作家として生きていくことを決心した。

この頃、雑誌『ストランド』で始まったホームズシリーズの連載が大変な人気を呼んだことも、作家として生きていく決意を後押ししたとされている。しかしドイルはホームズの人気を快く思っていなかった。ドイルは歴史小説を書きたかったが、出版社からの依頼はホームズものばかりであった。ドイルは出版社が受け入れないようにと、12編のホームズの連載を書く代わりに多額の報酬を要求した。しかし出版社はこれを受け入れた。1892年からこの連載は始まった。そして最後の12編目、『最後の事件』の作中でホームズを滝つぼに落とし殺してしまう。ファンからは非難や怒りの手紙が押し寄せ、ロンドンではホームズの死を悼み、喪に服す者も現れた。

同じ頃、妻のルイズが結核に冒され、もってあと数か月だと宣告された。ルイズの療養のため、ドイル一家はスイスのホテルへ移り住んだ。清涼なスイスの空気は、ルイズの病状を快方に向かわせた。イギリスのサリー州に結核の療養に良い土地があるという噂を聞くと、ルイズの要望もあり1897年にドイルはサリー州のハインドヘッドに家を建てた。ところが家ができる少し前、ドイルはジーン・レッキーと出会い、二人は恋に落ちることになった。ドイルの助けを必要とするルイズを思い、ジーンとはプラトニックな関係を努めて保っていた。

1899年にボア戦争が勃発すると、ドイルは医師として戦線に加わった。終戦後、ヨーロッパ中に伝えられたイギリス軍の残虐性が、自身の経験と大きくかけ離れていると感じたドイルは、真実を訴えるべきだと考えた。1902年に『南アフリカの戦争——その原因と行動』というパンフレットを書き上げ廉価で販売し、また、一般から募った基金をもとに外国にも無料で配布した。この愛国的活動が評価され、ドイルは爵位を授かることとなった。

1906年、妻ルイズが闘病の末亡くなる。翌年、ジーン・レッキーと結婚する。二人目の妻ジーンは後の1921年、靈媒能力に目覚めることとなる。そして、心霊主義者となったドイルとともに心霊主義布教に努めることとなる。

ドイルはホームズに並ぶ魅力的なキャラクターを生み出す。1912年に発表されたSF小説『失われた世界』、その主人公チャレンジャー教授である。アマゾンの奥地に現存する恐竜を探しにいくこのSF小説は大変な人気を博し、映画化もされた。

第一次世界大戦の最中、ドイルは心霊学雑誌『Light』に心霊主義者となる声明文を発表する。ドイルは1930年に亡くなるまで残りの人生を心霊主義布教に費やした。

ドイルが心霊主義者へと転向したのは決して気まぐれではなく、幼少期から抱いていた宗教への疑問、そして30年以上に及んだ心霊現象の探究があればこそであった。次節ではドイルの幼少期からの宗教観の変遷、そして心霊主義探究の跡を追つていきたい。

2. 心霊主義とドイルの関わり

アーサー・コナン・ドイルの生まれたドイル家は、アイルランドに由来する伝統的なカトリック一家であった。ドイルも幼少期にイエズス会の学校で神学を学んだ。ところがある時、アイルランド人のカトリック司祭が「カトリック教徒ではない人間は地獄に落ちるだろう」と公の場所で宣言するのを聞き、ドイルはひどく驚いた。カトリックの偏狭な見解に対し疑問を感じるようになった¹⁶。エディンバラ大学で医学を学ぶようになると、その反感はより強くなる。1881年、卒業を控えたドイルの将来について、ドイル一族は彼を援助する提案をした。ロンドンにて芸術や文学で成功していたドイル一族の影響力は大きく、ドイルがカトリックとして医院を開業するならば、カトリック教徒の友人を患者として紹介すると提案した。しかし、ドイルはその提案を受け入れなかつた¹⁷。この頃のドイルはカトリックの教義を捨てたが、神の存在は否定しきれずにいた。

この宇宙は不变の法則によってこしらえられたのだという説では、それではその法則は誰がこしらえたのかという疑問を生むだけである。(中略) 大自然の背後には知性をそなえたエネルギーが存在する—それはあまりに複雑かつ巨大なもので、ただ存在するということ以上には、私の頭脳では説明しようのないもの—ということである。¹⁸

サウスシーで個人医院を開業した頃、友人に誘われ、ドイルは心霊現象の実験会に参加する¹⁹。テーブル通信により意味の通じるメッセージを受け取ったが、ドイル

は現象を疑った。自分以外の誰かがテーブルを操っている、しかし友人は騙すような行為をする者たちではないと、ジレンマに陥った。そして心霊主義に関する著作を読み漁るようになる。ドイルはクルックスやウォレス、天文学者のフラマリオン (Camille Flammarion : 1842~1925) など、第一級の科学者が魂の死後存続を信じていることに驚いた。心霊主義を否定する科学者一たとえば、ダーウィンやハクスリー (Thomas Huxley : 1825~1895)、チンダル (John Tyndall : 1820~1893)、スペンサー (Herbert Spencer : 1820~1903) など一の名前を口実に、一時は懷疑的態度をとっていた。ところが、そうした否定論者は調査や研究を行うことなくただ嫌っているだけだということを知った。一方で、自ら心霊現象の調査に乗り出し、現象の法則を探ろうとした者がいることがわかり、どちらが正しい科学者の方であろうかと考えると、ドイルの懷疑的態度は少し薄れていった。1891年には心霊研究協会 SPR に入会する。SPR の持つ研究報告書に目を通すためである。第一次世界大戦に至るまで、ドイルは心霊主義に関する著作、研究書を読み、交霊会に出席し数多くの心霊現象を目にしていた。しかし一貫して慎重な態度で心霊研究を行っていた。

1914年に第一次世界大戦が起き、多くの命が失われた。ドイルの周りでも、妻ジーンの弟マルコム・レッキーや、妹ロティの夫オスカー・ホーナングなど戦死者が続出した。この頃、ジーンの友人リリー・ロダー・サイモンズが自動書記の靈媒能力に目覚める。本人の意思とは別に手が動き、死者からのメッセージを綴る能力である。ドイルは当初この現象に疑念を抱いていた。本当に靈界、死者から届けられたものなのか、それとも靈媒のリリー自身の潜在意識から生じるものであるか、判別がつかないからである。しかし、ある時リリーの自動書記を通じて、戦死した義理の弟、マルコムからのメッセージを受け取る。その内容はドイルとマルコム以外には誰も知らないはずのものであった。それはドイルが30年間の心霊研究で求め続けていた客観的事実であった²⁰。1916年10月21日、ドイルは心霊学雑誌『Light』に心霊主義者となる声明文を発表した。

心霊主義の思想的側面と現象的側面の両方の相関関係を扱うという試みとして書かれた作品『新しき啓示』の中で、ドイルは自分が心霊現象を確信した頃を振り返り、以下のように述べている。

私はこれまで自分がだらしなく引きずってきた問題は、実は物質科学が知らずにいるエネルギーが存在するとかしないとかといった呑ん気なものではな

く、この世とあの世との壁を突き崩し、この未曾有の困難の時代に人類に用意された靈界からの希望と導きの呼びかけなのだという考えが閃いた。これは大変なことなのだと気がついた。

そう思った私は、客観的な現象への興味が薄らぎ、それが実在するものであることさえ確信すれば、それで、その現象の用事は済んだのだと考えた。それよりも、それが示唆している宗教的側面の方がはるかに大切なのだと思うようになった。

電話のベルが鳴る仕掛けは他愛もないが、それが途方もなく重大な知らせの到来を告げてくれることがある。心靈現象は、目を見張るようなものであっても、ささいなものであっても、電話のベルにすぎなかつたのだ。それ自体は他愛もない現象である。が、それが人類にこう呼びかけていたのだ——“目を覚ましなさい！　出番にそなえなさい！　よく見られよ、これがしるしなのです。それが神からのメッセージへと導いてくれます”と。

本当に大事なのはその“しるし”ではなく、そのあとにくるメッセージだったのである。²¹

心靈主義者となったドイルにとって、心靈主義は人生で最も重要な問題となった。同時に、これまでの自分の生涯はこのために準備されたものだと考えるようになった²²。心靈主義の伝道者として、ドイルは 1916 年から心靈主義布教の講演旅行を始める。イギリス中を旅した後、1920 年にはオーストラリア、1921 年にはフランス、1922 年にはアメリカ、1928 年にはアフリカへとそれぞれ講演に向かつた。そうした活動のなか、妻のジーンにも大きな変化が生じることとなる。彼女は、当初心靈主義に対しては理解を示していなかった。ところが 1921 年、ジーンは自動書記の靈媒能力に目覚める。以降ジーンはドイルの理解者、協力者となったのであった²³。

心靈主義に目覚めたドイルは、心靈主義に関する著作の執筆も行った。主要な作品は以下の【表 1】の通りである。

本稿で取り上げる『霧の国』は、『失われた世界』、『毒ガス帶』で人気を博していた SF 小説であるチャレンジャーシリーズの 3 作目として書かれた作品である。しかし前 2 作と比べて、『霧の国』はこれまでのドイルの SF 小説とは異なる点が多数存在する。

1918年	新しき啓示
1919年	重大なるメッセージ
1925年	霧の国
1926年	心靈主義の歴史

【表1】ドイルによる心靈主義関連著作

第3章 『霧の国』

1. チャレンジャーシリーズ

半分おとなの子供か
 半分こどもの大人が
 ひとときを楽しめれば、と
 へたな趣向をこしらえた次第²⁴

これはドイルが 1912 年に発表した SF 小説『失われた世界』の扉の一文である。事実、この作品は大人も子供も魅了したが、ドイルも自身が生み出したチャレンジャー教授を大変気に入っていた。チャレンジャー教授とはドイルが 1912 年から書き出した一連の SF 小説の主人公で、これは“チャレンジャーシリーズ”として人気を博し、1929 年まで 5 作品を連ねた。

ドイルは冒険的なもの、読者を、そして自分自身をも魅了する作品を書きたいと思っていた²⁵。ドイルの書斎の窓から見えるサセックス丘陵地帯でイグアノドンの足跡の化石が発見され、ドイルはそれを保存していた。同じくレイ・ランケスター (Edwin Ray Lankester : 1847~1929) の書いた絶滅した動物に関する研究書も読んでいた。絶滅した恐竜、それが人の手のつかないアマゾンの奥地に現存しているとしたら—そうしたインスピレーションのもと、『失われた世界』は誕生した。ドイルはこの作品に真実味を持たせようと、写実的な描写を心掛けた。それだけではなく、プロの写真家や画家に協力を仰ぎ、作品の舞台である南アメリカの大地や探検家一行の地図や写真などをでっち上げて連載に載せることで、その迫真性は更に高まった²⁶。ドイル自身チャレンジャーに扮し写真を撮り、連載に載せようとしていた²⁷。ドイルはこの扮装を気に入り、妹の夫の前に名を偽り現れ、義弟をひどく怒らせる

などして楽しんでいたという。

『失われた世界』の魅力は恐竜という題材だけでなく、その登場人物にもある。チャレンジャー教授をはじめとする探検隊の一一行、チャレンジャー教授の理論に疑問を抱き、絶えず意見を衝突させるライバル科学者サマリー教授、一流のスポーツマン、探検家で銃の扱いに長けたジョン・ロクストン卿、そして恋人にそそのかされ、英雄的冒険を求める若き新聞記者で、この作品の語り手でもあるエドワード・マローンの4人である。4人が時に反発し、時に協力しながら前進していくさまは、失われた世界での冒険を一層痛快なものにさせる。

特にチャレンジャーの言動には際立ったものがある。無礼な行いをするマローンにタックルをかまし、自身の恐竜が生存しているという学説を受け入れない科学者たちに皮肉たっぷりの罵詈雑言を浴びせかける。上でもふれたように、ドイルがチャレンジャーの扮装を楽しんで行っていたことから、チャレンジャーは抑制から解き放たれたドイル自身を描いているという意見もある²⁸。『失われた世界』は大きな反響を呼び、ペンシルヴァニア大学の所有するヨットに乗ったアメリカの探検家一行がアマゾンの上流に向かい“失われた世界”を探そうとしたり²⁹、後の1925年には映画化されたりもした³⁰。

もうひとつのチャレンジャー教授もの、『毒ガス帶』は『失われた世界』の翌年に発表された。公転軌道上に出現した毒ガス帶に地球がすっぽりと包まれ、人類が滅亡するという科学的可能性を提唱するチャレンジャー教授のもとに、サマリー教授、ロクストン卿、マローンの失われた世界を旅した人々が集結する。チャレンジャー夫人を加えた5人がチャレンジャー宅の一室を気密室にして立てこもり、酸素ボンベで酸素を補給しながら毒ガスの海に沈みゆくイギリスの街並みを観察する。あちこちで火の手が上がり、運転手が死んだ列車が暴走し、貨物車にぶつかり大破する惨状を目撃しながら、人類最後の生き残りとなった5人は生と死について語り合う。一夜が明け、酸素の残りが少なくなると、一行は死の決心を固め、チャレンジャーが双眼鏡を投げつけ窓を割る。しかし何も起こらない。地球は毒ガス帶を抜け、大気は正常に戻っていた。生き残った5人はロンドンへ向け車を走らせる。道中に横たわる死体の数々や、死の街と化したロンドンを目にする。ところが28時間後、死者たちが一斉に、何事もなかったかのように目覚める。毒ガスに冒された人類は硬直症にかかり、死と同じような状態で眠っていただけであった。マローンの記事により事の真相を知った人々は、人類の無力さ、限界を知る。以上が『毒ガス帶』の筋書きである。

物語の主な舞台は目張りされた密室であるが、窓から見える数々の惨劇の描写は真に迫り、チャレンジャー夫人を加えた個性的な面々のやり取り、死に直面した者たちの語り合う姿も大変興味深く読むことができる。

晩年の 1928 年、1929 年にはそれぞれ『地球の悲鳴』と『分解機』というシリーズの短編を書いた。このように、ドイルはチャレンジャー教授を主人公とする冒険 SF 小説を 5 作書く。本稿の主題である『霧の国』は、このシリーズの 3 作目として 1925 年に著された作品である。

2. 作品『霧の国』の概要

チャレンジャー・シリーズの第 3 作目として連載が始まった『霧の国』は、本シリーズの前作の 2 作品とは趣が大きく異なる。1916 年に心靈主義者であることを表明したドイルは、心靈主義を主題にこの物語を書きあげたからであると推察される。本節では、この作品の概要について紹介する³¹。

『霧の国』は、冒頭でマローンとチャレンジャーの娘イーニッドの二人が心靈主義者の集会へ取材に向かおうとするところから物語が始まる。チャレンジャーは靈魂の存在を否定し、死後には何も残らないと主張する。愛する妻を亡くし、目の前で遺体が焼かれるさまを見たとき、死は全てに終止符を打つことを確信したのである。マローンもチャレンジャーの意見に賛同する。マローンとイーニッドは心靈教会に向かい、死者からのメッセージを受け取る交霊会の様子を取材する。

交霊会では、靈媒が靈界からとされるいくつものメッセージを受け取り伝えた。そしてマローンに対し、1 年前に亡くなったサマリー教授から「チャレンジャーによろしく」というメッセージが伝えられる。集会から帰り、マローンたちがその話をすると、チャレンジャーは怒り狂った。サマリーならもっとましなことを言う。マローンが取材に向かうことが心靈主義者たちに知れ渡っており、我々の名前を利用されたに過ぎない、とチャレンジャーは主張した。

チャレンジャーの心靈主義の否定は、物語終盤まで揺らぐことはない。その一方で、マローンは心靈主義者の取材を続けるなかで、多くの心靈主義者、心靈研究者に出会い、交霊会で様々な現象を目撃した。

ロクストン卿もまた、その冒險心から心靈研究の領域へ足を踏み入れ、マローンと心靈主義者のメイソン牧師とともに幽霊屋敷の調査に乗り出す。屋敷に取りついた悪霊をメイソン牧師が救い出すのを聞き、ロクストン卿も心靈の世界に関心をもって出かけることになったのである。

ある時、チャレンジャーは心霊主義者の代表者と討論を行ってもよい、という提案をする。そこでチャレンジャーと、心霊主義者の代表で心霊主義を取り扱う新聞の編集長ジェイムズ・スミスとの討論会が開かれた。この討論会の席上、チャレンジャーは失態を犯す。心霊主義を否定するためにチャレンジャーが持ち出したまやかしやトリックの話は、心霊主義者の間でも非難されてきたものであり、こうしたインチキの摘発は数多くなされていた。他方、スミスの方が用意していたのは多くの科学者が行った心霊研究の成果であった。研究者たちによる現象の実在の証言などを知っているかと尋ねられても、チャレンジャーは答えることができず、ただ怒りを爆発させるだけに終始するのであった。

物語の終盤、マローンはついにチャレンジャーを交霊会の場へと出席させる。そこで、教授の娘イーニッドが霊媒能力に目覚める。イーニッドを通じ、亡くなったチャレンジャーの妻からのメッセージが届けられた。チャレンジャーは、最初はイーニッドを含めた出席者が策略を巡らしたと考えた。しかし、続けて別のメッセージが届けられる。それはウェアとオールドリッジという、チャレンジャーが若き医者だったころ受け持っていた患者の名前であった。当時のチャレンジャーは議論の対象になっていた新薬を入手し、密かに二人の患者に与えた。翌朝、二人は亡くなってしまう。重病の患者であったため病院の管理体制が問われることはなかったが、自分の行った投薬が二人を死に至らしたのではと、チャレンジャー自身は悩み続けていたのであった。ところがイーニッドを通じて伝えられた二人からのメッセージは、チャレンジャーの投薬により死んだのではなく、肺炎により死んだというものであった。すでに死んでいる二人の患者以外、チャレンジャーしか知りえないメッセージを受け取ったことで、チャレンジャーはひどく驚嘆する。結局、チャレンジャーも最後は心霊現象を受け入れ、心霊研究に没頭することとなる。

以上が『霧の国』のあらましである。

『霧の国』が前二作のチャレンジャーシリーズと異なる点として、三人称視点で書かれている点が挙げられる。前作である『失われた世界』と『毒ガス帶』では、チャレンジャー教授一行と冒険をともにする新聞記者マローンを中心に、彼自身の一人称視点という体裁で書かれていた。しかし、『霧の国』では、取材を重ねるマローンと心霊主義を否定するチャレンジャーが行動をともにすることは少なく、また第6章では霊媒のトム・リンデンが婦人警官たちの策略により告発される場面が、第11章ではトムの弟でインチキを行った偽霊媒のサイラス・リンデンが報いを受け場面が描かれるというように、いくつも場面が切り替えられている。

実際、『霧の国』が連載された『ストランド』の巻頭言に、作中の種々の物語がドイルの長年に渡る心霊研究の経験を参照していると述べられている。

著者のコナン・ドイル卿はこの分野に関し、三六年にわたる研究をしたという、他に類をみない経験の持ち主であり、現在、世界の中心であるフランス心霊協会の名誉理事長であるということに心を留めて頂きたい。卿はこれらの経験の幾つかを物語の形で読者の前に呈示し、この心霊主義運動の強さと、弱さとを見事に描き出している。インチキな靈媒の存在も遠慮会釈なく暴かれている。³²

この作品の中でマローンはフランスの交霊会へ取材に赴くが、そこにはリシェ(Charles Robert Richet : 1850~1935) やフラマリオンが登場する。また、心霊研究者としてウォレスやクルックスなどの名前が度々挙げられている。すなわち、この作品が書かれた当時の心霊主義の実情がほぼそのまま作品に反映されていると言うことができる。

その一方で、『霧の国』では、それまでのチャレンジャーシリーズに見られた 4 人での冒険は失われてしまった。サマリー教授は既に死んでおり、心霊主義を否定するチャレンジャーと取材を続けるマローンは方向性が全く異なり、ともに行動することは少ない。作中のほとんどがマローンに追随する形で書かれている。ドイル自身、『霧の国』の発表前はこの作品のタイトルを『エドワード・マローンの心霊学的冒険』としていたことから、マローンが中心の物語であることが伺える³³。これまで一行のリーダーとして物語を引っ張ってきたチャレンジャー教授であったが、『霧の国』では心霊主義者に敵対する唯物論者として描かれ、主導権を握ることはないと言ってもよい。

『霧の国』を前作の『失われた世界』と『毒ガス帶』からの継続性を備えたチャレンジャーシリーズの作品として描きながら、それらを比較すると『霧の国』にはこのシリーズとして様々な矛盾が生じていると感じられる。こうした矛盾も含め、ドイルが『霧の国』をチャレンジャーシリーズとして発表した意図については次章で検討する。

第4章 『霧の国』考察

1. イーニッドの存在

チャレンジャーの娘イーニッドは『霧の国』の冒頭で初めてチャレンジャーシリーズに登場する。妻を亡くしたチャレンジャーの支えとなり、新聞記者の仕事に就いていた。そして読者の友人³⁴エドワード・マローンと恋仲であることがほのめかされている。しかしこのチャレンジャーの娘イーニッドは前作『毒ガス帶』や前々作『失われた世界』には全く登場していない。特に『毒ガス帶』でイーニッドの存在が書かれていなくても関わらず、『霧の国』で突然登場する点に違和感が生じる。

『毒ガス帶』の中でチャレンジャー一家の家族構成を伺わせる場面がある。全人類が毒ガスにより死滅し、ノアの方舟と化したチャレンジャー宅の一室で、チャレンジャー夫人はすでに亡くなっているであろう家族へ思いをはせる。

「ふしげでならないのは」と、チャレンジャー夫人が口をはさんだ。「これだけ人間が死んでいるというのに、わたしがちっとも悲しいと思わないことですわ。ベドフォードにはわたしの両親が住んでおりますけど、きっともう死んでしまったにちがいありません。それなのに、このものすごい悲劇を目の前にしながら、わたしは個人個人はおろか、両親の死にたいしてもぜんぜん深い悲しみを感じないです」³⁵

チャレンジャーの自宅を舞台の中心にしていながら、チャレンジャー夫妻の間に娘がいるという描写はどこにもなく、上記のチャレンジャー夫人の台詞にも見受けられない。では『毒ガス帶』と『霧の国』の間に生まれたと考えられるのか。確かに両作の間に時間の経過は存在するが、イーニッドが成人女性として成長する程の隔たりはないと思われる。それはチャレンジャーシリーズ 3 作の作中年代を細かく見ることで明らかとなる。

『失われた世界』の序盤、23歳の新人記者マローン³⁶は 11 月のある日チャレンジャーを訪問し、チャレンジャーからアマゾンの奥地に絶滅したとされている恐竜が今なお生存している可能性を聞かされる。チャレンジャーはインディアンの集落で亡くなったアメリカ人の画家、メイプル・ホワイトの残したスケッチブックをマローンに見せる。メイプル・ホワイトのスケッチブックには奇怪でグロテスクな怪獣が描かれていた。そしてチャレンジャーが次のように言いながらある本を差し出す。

「これはわしの友人で、才能のあるレイ・ランケスターの書いたすぐれた論文だ！　ここにきみの関心をひくようなさし絵があるよ。ああ、これ、ここにある！　その下に説明が書いてある。“ジュラ紀に生息した恐竜の一種、剣竜の生体想像図、後脚だけで成人した男の丈の二倍はある”　さあ、これをどう思うかね？」³⁷

ここでチャレンジャーが取り出した本は、ドイルが『失われた世界』を書く際に参照したランケスターの *Extinct Animals* である。これにステゴサウルス³⁸の挿絵が載っており、その下の説明文もチャレンジャーの台詞と一致する³⁹。この本は 1905 年に出版されているから、上記のチャレンジャーとマローンのやり取りも 1905 年以降の 11 月に行われたこととなる。そしてチャレンジャー一行の“失われた世界”への旅は、翌年の 7 月から行われたことが、チャレンジャーの書いた封筒から読み取れる⁴⁰。

『毒ガス帶』では『失われた世界』の旅から 3 年経過していることが、冒頭のマローンの台詞から伺える。

わたしが出社して、いまなお社会部を牛耳っているマッカードル氏に、三日間の休暇を願い出たのは、八月二十七日、金曜日のことであった(中略)

「ちょうどよかったです。ぼくが休暇を願い出たのは、たまたまロザーフィールドのチャレンジャー教授を訪問するためだったからです。実を申すと、きょうは三年前の台地での大冒険の記念日なんです。それで、ぼくたち全員が先生の家に集まって、その事件を祝おうじゃないか、そう教授がいってきましたもんですから」⁴¹

つまり『毒ガス帶』の作中の出来事は、最も早くて 1909 年の 8 月 27 日に当たることとなる。では『霧の国』との時間的な隔たりはどのくらいになるのか。

『霧の国』の作中でマローンはフランスの心霊学研究所で行われた交霊会に参加する。参加者の中にフランスの生理学者シャルル・リシェと、天文学者のカミーユ・フラマリオンがいる⁴²。フラマリオンは 1925 年の 6 月に亡くなっている。『霧の国』冒頭に「それは十月のある日曜日の夕刻のことであった。」⁴³とあること、第一次世界大戦が終結したあとであること⁴⁴から、『霧の国』の作中年代は 1919 年から 1924

年の 10 月以前の作ということになる。

仮に 1924 年の 10 月が『霧の国』作中年代であるとすると、『毒ガス帯』の最も早い作中年代 1909 年の 8 月から経過した年数は 15 年ということとなる。『毒ガス帯』に全く現れなかったイーニッドが『霧の国』までに生まれたとすると、イーニッドの年齢は 14、15 歳となる。イーニッドは新聞記者として 42 歳のマローンとともに仕事をし、訪れた心霊主義者の集会では女性として扱われていることなど、15 歳前後とは思えない描かれ方をされている。イーニッドの存在がとても不自然なものに感じられる。

2. 歪められたチャレンジャー

『毒ガス帯』においてチャレンジャーは魂の死後存続をほのめかす発言をしている。

「もしあびえている人間が優しさを求めるにすれば、それはきっと一つの生から次の生へと危険な航海をするときだろうな。いやいや、サマリー君、わしにはきみの物質中心主義はいただけないね。なぜなら、少なくともわし個人は、死んだとき、単に物質的要素、つまり、一握りの塩とバケツ三杯分の水となってしまうにはあまりにも偉大すぎる人物だからね。ここに——ここにはだよ」——と彼は大きな毛深いこぶしで大きな頭をたたいて見せた——「物質を利用こそすれ、物質そのものではないなにかが——死を破壊するが、死によって破壊されることのないなにかがあるんだな」⁴⁵

更に『毒ガス帯』のチャレンジャーは肉体と精神について次のように述べる。

「肉体についていえばだね」と、チャレンジャー。「われわれはたとえそれが自分の体の一部であっても、切りはなした爪や髪の毛を悼みはせんよ。同様に、片脚の人間がなくなった脚をなつかしく思い出すこともないんだ。物質的な意味での肉体は、苦痛と疲労の源泉でしかなかった。それは昔から人の能力の限界を示すものだった。それなのに、われわれはなぜ肉体と精神の分離についてよくよ思いまどわなければならんのかね？」⁴⁶

このチャレンジャーの考え方を、後に心霊主義者となったドイルが書いた心霊学書

『重大なるメッセージ』の一節と比較すると大変興味深い。

老人は若返るのであるから、女性は老化による美の衰えを嘆く必要はなく、男性はからだが言うことをきかなくなつたことや頭脳の衰えを嘆く必要はないわけである。あちらへ行けば、失ったものがすべて取り戻せるのである。

同じことが身体の障害についても言える。その障害のすべてが消滅しているのである。手足は戻り、視力も戻り、知的能力も本来のものが取り戻せるのである。障害を受けているのは肉体だけなのである。靈的身体は決して傷つかない。完全無欠である。⁴⁷

このように『毒ガス帶』のチャレンジャーは死後の世界や魂の死後存続をあり得るものとして発言し、心靈主義の思想も持ち合わせているように描かれている。『毒ガス帶』が発表された 1913 年の時点ではドイルはまだ心靈主義者ではなかったが、心靈主義の研究は精力的に行っていた。イギリス文学研究者であり、英國心靈主義研究者でもある藤野敬介は論文「コナン・ドイルの『毒ガス帶』—蒔かれた心靈主義者の種子—」でこう述べている。

心靈愛好家ドイルが『毒ガス帶』執筆時に心靈主義思想、特に「次なる世界」の概念の強い影響下にあったことは間違いない。⁴⁸

事実、『毒ガス帶』でチャレンジャー他の登場人物の(本論では割愛したが、特にチャレンジャー夫人による)台詞を通じてドイルが提示した「次なる世界」の概念は、心靈主義の真髄を高いレベルで反映したものであった。⁴⁹

ところが『霧の国』でのチャレンジャーは一転して心靈主義を否定する。

「お前はわしのような道理のわかる頭の持ち主が、しかも第一級の頭の持ち主が、まったくバカらしいものを、読んだり、研究したりしなくちゃあわからんとでも思ってるのかい？」⁵⁰

亡くなった妻に關しても、魂の死後存続はありえないと主張する。

「いとしい妻の体が分解して元素になり、そのガスが空中に散ってしまい、固体物の残りも灰になってしまったとき、すべてが終わったんだよ。もうなんにも残っちゃいないんだ。あれは自分のつとめを、美しく、けだかくつとめ終えたのさ。もうおしまいだよ。死はすべてに終止符を打つんだよ、マローン君。この魂の話など、原始人が木石にも靈魂があると信じるのにも似たバカらしい事なんだ。そりや迷信だ。神がかりだ。(中略) 木が倒れりや、そのまま倒れているもんさ。死者にとっては、あくる朝なんてもんはありえないんだ——あるのは夜ばかり、永遠に夜ばかりだ……疲れた働き手はとこしえに休むだけのことさ」(中略)

「でも、あたしの本能は反対ですわ！」イーニッドは叫んだ。「だめ、だめ、あたしにはとても信じられないわ」彼女は両腕を父の雄牛のように太い首にまわした。「お父さん、あなたのその複雑な頭脳と立派な体がこれから先の世で、こわれた時計みたいに、なんの役にもたたなくなるなんておっしゃらないでちょうどいい」

「死ねば、バケツ四杯分の水と、ひとふくろの塩になるのさ」チャレンジャーは娘の手首をふりほどきながらいった。⁵¹

『毒ガス帯』では「一握りの塩とバケツ三杯分の水とになってしまうにはあまりにも偉大すぎる人物だからね。」と述べていたことと比較すると、死に対する考え方が真逆になっていることがわかる。

チャレンジャーの科学に対する姿勢も大きく異なっている。『失われた世界』の序盤において、チャレンジャーは動物学会で開かれた博物学者パーシヴァル・ウォールドロンの講演会に出席する。ウォールドロンは科学的に解き明かされた地球の歴史を語るが、先史時代の絶滅した生物の話に及ぶと、チャレンジャーは口を挟む。

「わたしのほうからもお願いがありますぞ、ウォールドロン君」彼はいった。
「科学的事実と正確に一致しない事柄を断定的にきめつけるのはやめていた
だきたいですな」⁵²

ウォールドロンの講演が終わるとチャレンジャーは壇上に立ち、自身の見解を述べる。

わたしはこの問題を素人としてではなく、また通俗講演者としてでもなく、科学の信念上やむにやまれず、その事実に固執せざるをえない者として、申すわけであります。ウォールドロン氏が自分の目で、いわゆる先史生物を見たことがないために、もうそれらは存在してはいないのだと思われるところが、たいへんなまちがいだ、とわたしは申すのであります。⁵³

奇しくも『霧の国』にも同じような場面がある。唯物論者チャレンジャーと心靈主義者ジェイムズ・スミスが聴衆を前に討論をする。チャレンジャーによる心靈否定の演説はすばらしいものであったが、多くの科学者による心靈研究を全く踏まえておらず、偏見に満ちた内容であることをスミスに指摘される。

おそらくチャレンジャー教授は、リシェやロンブローゾやクルックスなどについて、彼らが迷信的な野蛮人であるかのように語る権利を与えるような個人的経験を自ら持たれ、それを聴衆に披露されるであろう。(中略)そうするまでは、科学的名声において、教授自身にほとんど劣らない人々を嘲ったりするのは非科学的であり、実にもってのほかでもある。この人たちはそのような実験を実際にを行い、しかもそれを大衆の前に発表したからである。⁵⁴

何事も経験する前には不可能だというのはたいへん危険なことであるが、チャレンジャー教授はまさにこの危険に陥っている。⁵⁵

ウォールドロンに対し告げたことと同じものを、チャレンジャー自身が指摘されてしまった。チャレンジャーの科学的姿勢も、シリーズを通じ一貫したものではなくになっている。

3. チャレンジャーの“利用”

前節で述べたとおり、『霧の国』はそれまでのドイルのチャレンジャーシリーズとは趣を大きく異にしている。不自然な娘の存在や、チャレンジャーの価値観が変わってしまっている矛盾が存在し、サマリーの死や個別に行動するマローンやロクストンなどチャレンジャーシリーズの4人による冒險活劇の要素も失われてしまった。そこまでしてチャレンジャーシリーズのひとつとして『霧の国』を描く必要があつたのだろうか。

そのヒントはドイルの自伝『わが思い出と冒険』の第31章、心霊の探求にある。ドイルは生涯最も重要な問題となった心霊主義についてこう語る。

私の生涯はまさにこのために準備されていたといってよい。宗教心の漸進的発展、公衆へ話しかける途を開いてくれた書物、金にならぬ仕事にも努力することを許してくれたつましい資産、考えを伝えるのに役立った講演の仕事、困難な旅にも耐え得るし大ホールの聴衆を一時間半も引きつける声をいまだに持つ肉体上の健康、こうしたもののがすべて無意識の準備となっていたのだ。

56

その心霊主義のために準備されたものの中に、チャレンジャーシリーズも含まれているとは考えられないだろうか。ドイルが自ら生み出し、大人気となっていたチャレンジャーを心霊主義のために利用したとすれば、シリーズとして『霧の国』を書いたこともうなずける。心霊主義の伝道者となったドイルを人々はすんなりとは受け入れられず、あのコナン・ドイルともあろう人が、と戸惑っていた⁵⁷。心霊主義布教の講演旅行の際も、人々はホームズの作者の話を聞こうとやってきたのに心霊主義の話を聞かされて期待を裏切られた⁵⁸。ドイルの語る心霊主義に人々は目を向けていなかった。しかしドイルは人々の関心を集めるためにあつらえ向きのキャラクターを持っていた。それが『失われた世界』で読者を魅了したチャレンジャーであり、チャレンジャーシリーズであった。

『霧の国』は当時の心霊主義の実状が色濃く反映された作品であるが、チャレンジャー自身もその前提に従っている。心霊主義に手を出した科学者は、一人の例外もなくその事実を認めていた⁵⁹。ウォレスやクルックスのように懐疑的、否定的な態度で臨んだ科学者は心霊主義を目の当たりにして真実であることを認める。チャレンジャーも心霊主義に捉われた科学者としてその流れに従う。心霊主義を描く以上、科学者の一貫とした心霊主義否定の態度は必然的なものだった。サマリーの死も、この点に集約される。『毒ガス帶』で死後の世界の存在を示唆するチャレンジャーに対し、サマリーは「肉体と精神の分離は果たして完全に起こりうるものだろうか？」⁶⁰と否定的であり、『霧の国』でもマローンが「かわいそうに老サマリー教授は死後の生命などバカげていると思っていた。」⁶¹と述べているなど典型的な否定論者であった。チャレンジャーシリーズにおけるサマリーの役割は、チャレンジャーの引き立て役だと言ってもよい。チャレンジャーの打ち出す新理論をサマリーは科学者と

して否定するが、最終的にはその説を受け入れる存在として描かれていた。しかし『霧の国』におけるチャレンジャーの敵対者は心霊主義者でなければならなかった。心霊主義否定論者としてチャレンジャーの協力者と成り得るサマリーは死という形で退場を余儀なくされた。同時にマローンに靈界からメッセージを伝え、心霊主義への関心を抱かせる役割も担うこととなる。

また、『霧の国』はフィクションではあるが、その内容の多くは現実に即している。作品の中で見られる心霊現象の数々はドイル自身の経験や、収集した様々な報告を元に描かれている。その中でドイルはチャレンジャーの存在をフィクションではなく現実のものにしようとしている。冒頭に「チャレンジャー教授は小説の中でまったく不当にあつかわれてきた。」⁶²とあるし、決定的なのがリシェを登場させ、「わたしの有名な友人チャレンジャー」⁶³と言わせていることである。『失われた世界』での足跡をたどろうと探検隊がアマゾンに向かうなど、科学者チャレンジャーは現実への影響力も持っていた。『霧の国』でもチャレンジャーをリシェやクルックスなど一流の科学者と同列に描き、最後には心霊現象を認めさせることで心霊主義に対する権威付けを行おうとしたのではないかと考えられる。

4. ドイルの現身としてのマローン

『霧の国』においては、チャレンジャーにはドイルが、イーニッドには靈媒能力に目覚めたドイルの妻ジーンが反映されているという意見がある⁶⁴。しかし前述したように、『霧の国』のチャレンジャーはウォレスやクルックスなどの心霊研究者の要素が強い。「あのはかないクモの巣をば科学の簞で払い除けなければならない」⁶⁵というチャレンジャーの言葉はホームを対象とした研究に乗り出すクルックスの懷疑的な声明文を思い出させる。イーニッドによる靈界からのメッセージを認めたチャレンジャーに対し、マローンが「クルックスもほとんど同じような言葉を使いましたよ」⁶⁶と述べていることからも、チャレンジャーに実在した心霊研究者を反映させていると言える。

ドイルの30年にわたる心霊主義への探求は、チャレンジャーよりもマローンに映されていると考えられる。心霊主義者の取材を行った当初、マローンは心霊現象に対し疑ってかかっていたが、探究を続けるにつれ、確信を深めていく。心霊現象を事実だと認めると、本当のことを書き伝えることが新聞社の義務だと考える。心霊主義に関しては面白おかしく扱って欲しい編集部と意見が対立し、マローンは解雇されてしまうが⁶⁷、こうした公正であることはドイルが重んじていたものであった。

最終章でマローンはイーニッドと結婚するが、その結びつきはドイルとジーンの関係を彷彿とさせる。

最後の場面、妻となったイーニッドに語りかけるマローンの台詞は、ドイルの思想そのものである。自伝の中でドイルは様々な宗教が語ってきた世界の終末の予言がいずれ現実のものになると語る。

私はこうしたことすべてをよく心得ているし、反対側から見た時にその時を定めることがいかに困難かをもよく知っている。そうしたすべてを考えたうえでなおかつ、この問題についての知識があまりにも細かく示されたので、私はそれを真剣に受けとらざるを得ぬし、人間経験の最大の峰を超えるものが、ここ数年のうちに来るであろうと考えざるを得ないのだ。⁶⁸

しかし心靈主義を信じるドイルにとって、世界の終末は何も恐れるものではなかった。

死が地上では手に入れ得ぬ幸福への入口であると確信している私たちにとって、死がどうして恐ろしいものであろうか。やがてすぐに後を追って近づけるとすれば、私たちは愛する者の死をどうして恐れたりするのであろうか。

⁶⁹

マローンも心靈主義による終末思想を語る。

「ああ、その点についてはミロマーの言葉を受け入れるほかはないね。彼はあらゆる薬壜の破壊について語ってるんだ。戦争、飢饉、悪病、地震、洪水、津波が起こり——そしてすべてがなんともいいようのない平和と栄光に終わるというんだよ」⁷⁰

しかしやはりマローンとイーニッドにとっても、死は恐れるものではなかった。

「ぼくたちは一つのことを学んだよ」と彼はいった。「真の愛情を持った二つの魂はあらゆる天体を絶え間なくずんずん進んでいくということだ。だから、どうしてきみやぼくは、死にしろ、生と死のもたらすものにしろ、恐れる必

要などあるだろうか？」

彼女はニッコリ笑って、自分の手を彼の手に預けた。

「ほんとうにそうじやないこと」彼女はいった。⁷¹

『霧の国』は当時の心霊主義の実状、ドイル自身の経験、想いを全てチャレンジャーやマローンたちに込めて世に送り出した、心霊主義の伝道者ドイルにとって集大成といえる作品である。

おわりに

ドイルが『霧の国』で行おうとした人々の目を心霊主義に向かせるという試みは、残念ながら成功したとは言えない結果となった。多くの人は心霊主義というテーマを嫌い、この作品を受け入れなかつた⁷²。しかしドイルが心霊主義、そして『霧の国』を通じて伝えようとしていたもの、真の進歩は物質的なものでなく精神的なものである、というテーマは形を変え現れることとなる。それがドイル最晩年の1929年に発表されたSF小説『マラコット深海』である⁷³。

老生物学者マラコット博士一行は大西洋の深海調査に乗り出しが不慮の事故に見舞われ海底に取り残される。万事休すかと思われた時、深海に住む人々に救出される。その人々は8千年もの昔海に沈んだという伝説だと思われていた、古代アトランティス文明の末裔であった。当時現れた指導者が海に沈むことを予見し、災厄に備えた対策をとったことで生きながらえたという。地上の知識をはるかに凌駕する科学に触れ、マラコット一行は海底冒険を楽しむ。

海底都市で語られるアトランティスの歴史の中に、物質主義の増大と精神的要素の衰退により人々が堕落したため水没という災厄が起きたと伝えられる個所がある。ドイルが描いたこのアトランティス衰亡の歴史は過去の物語でなく、現代への提言であるとする意見がある⁷⁴。『マラコット深海』には心霊主義の思想が色濃く反映されており、『霧の国』が人々に受け入れられずとも、闘い続けたドイルの姿勢を表す作品と言える。

「問題なのは、今、自分は何をなすべきかということだけです」働き続けるドイルを心配する主治医に対し、ドイルはこう答えたという⁷⁵。ドイルの生涯はまさしくその時々、自分のなすべきことをしてきたと言ってよい。信じない教義のために患者は取れないとカトリック教義を捨てたこと、娯楽雑誌にホームズの連載を書き人

気を博したこと、愛国者としてボーア戦争に関するパンフレットを廉価で出版したこと、行き過ぎた物質主義により生じた第一次世界大戦を憂い、心靈主義者となり布教に全精力を注いだこと、その全ての行動は上記のひとことに集約される。

ドイルは妻のジーンとともにハンプシャー州ミンステッドの教会に埋葬されている。墓標には次のように記されているという⁷⁶。

鋼の真実

誠実な刃

アーサー・コナン・ドイル

騎士、愛国者、医者、そして文学者

ドイルの唱えた心靈主義が正しかったかどうか、評価を下すことは難しい。しかし心靈主義に関することだけがドイルにとって特殊な、狂気の産物によるものだとは考えられない。他のありとあらゆる要素と同様に、ドイルは誠実に心靈主義と向き合い、それを正直に広く知らしめた。この真っ直ぐな姿勢は十分に評価し得るものである。

参考文献

【第1次文献】

ドイル、アーサー・コナン『失われた世界』龍口直太郎訳、東京創元社、1970年。

ドイル、アーサー・コナン『失われた世界』加島祥造訳、早川書房、1996年。

ドイル、アーサー・コナン『毒ガス帶』龍口直太郎訳、東京創元社、1971年。

ドイル、アーサー・コナン『コナン・ドイルの心靈学』近藤千雄訳、潮文社、2007年。

ドイル、アーサー・コナン『わが思い出と冒險』延原謙訳、新潮社、1965年。

ドイル、アーサー・コナン『霧の国』龍口直太郎訳、東京創元社、1971年。

ドイル、アーサー・コナン『マラコット深海』大西尹明訳、東京創元社、1963年。

【第2次文献】

Crookes, William, "Researches into the phenomena of modern spiritualism",
THE QUARTERLY JOURNAL OF SCIENCE, London, 1874.

Lankester, Edwin Ray, *Extinct Animals*, Archibald Constable & Co LTD,

London, 1905.

ウォレス、アルフレッド・ラッセ, 『心靈と進化と 奇跡と近代スピリチュアリズム』

近藤千雄訳、潮文社、1985年。

オッペンハイム、ジャネット『英國心靈主義の抬頭』和田芳久訳、工作舎、1992年。

カー、ジョン・ディクスン『コナン・ドイル』大久保康雄訳、早川書房、1980年。

スタシャワー、ダニエル他編、『コナン・ドイル書簡集』日暮雅通訳、

東洋書林、2012年。

河村幹夫『コナン・ドイル——ホームズ・SF・心靈主義』講談社、1991年。

藤野敬介「コナン・ドイルの『毒ガス帶』一薄かれた心靈主義者の種子—」、

『Walpurgis 2009』、國學院大學外国语研究室外国语文化学科、2009年。

三浦清宏『近代スピリチュアリズムの歴史 心靈研究から超心理学へ』

講談社、2008年。

1 三浦清宏『近代スピリチュアリズムの歴史 心靈研究から超心理学へ』、講談社、2008年、pp.190-191。

2 三浦『近代スピリチュアリズムの歴史』第1章

3 物品に触れることでその物自身や所有者の来歴を語る靈媒能力。

4 ジャネット・オッペンハイム『英國心靈主義の抬頭』和田芳久訳、工作舎、1992年、pp.28-36.

5 アルフレッド・ラッセル・ウォレス『心靈と進化と 奇跡と近代スピリチュアリズム』近藤千雄訳、潮文社、1985年、pp.4-6、pp.141-153.

6 三浦『近代スピリチュアリズムの歴史』pp.95-97.

7 コナン・ドイル『コナン・ドイルの心靈学』近藤千雄訳、潮文社、2007年、p.58.

8 William Crookes, "Researches into the phenomena of modern spiritualism", THE QUARTERLY JOURNAL OF SCIENCE, London, 1874, p.5.

9 三浦『近代スピリチュアリズムの歴史』pp.99-106.

10 三浦『近代スピリチュアリズムの歴史』pp.117-119.

11 アーサー・コナン・ドイルの生涯に関しては以下の文献を参照した。

ジョン・ディクスン・カー『コナン・ドイル』大久保康雄訳、早川書房、1980年、河村幹夫、『コナン・ドイル——ホームズ・SF・心靈主義』、講談社、1991年。

12 エディンバラ大学の外科医、エディンバラ診療所の医師。

13 エディンバラ大学の生理学者。

14 カー『コナン・ドイル』、p.92.

15 コナン・ドイル『わが思い出と冒險』延原謙訳、新潮社、1965年、pp.31-34.

16 ドイル『わが思い出と冒險』、pp.25-26.

17 河村『コナン・ドイル——ホームズ・SF・心靈主義』、pp.41-44.

18 ドイル『コナン・ドイルの心靈学』、p.34.

19 ドイルのサウスシーでの開業から第一次世界大戦勃発までの心靈研究の足跡は、『新しき啓

-
- 示』第1章を参照した。
- 20 カー『コナン・ドイル』、pp.474-487.
- 21 ドイル『コナン・ドイルの心霊学』、pp.50-51.
- 22 ドイル『わが思い出と冒険』、第31章。
- 23 河村『コナン・ドイル 一ホームズ・SF・心霊主義』、p.188.
- 24 コナン・ドイル『失われた世界』加島祥造訳、早川書房、1996年、巻頭。
- 25 カー『コナン・ドイル』、第17章。
- 26 ダニエル・スタシャワー、ジョン・レレンバーグ、チャールズフォーリー編『コナン・ドイル書簡集』日暮雅通訳、東洋書林、2012年、pp.620-621.
- 27 ドイルは自分が扮装した写真をチャレンジャーとして雑誌『ストランド』に掲載しようとしたが、読者にインチキを疑われるのではと編集者に指摘されお蔵入りとなった。 カー『コナン・ドイル』、p.403.
- 28 カー『コナン・ドイル』、pp.399-400.
- 29 カー『コナン・ドイル』、p.432.
- 30 ロナルド・ピアソール『シャーロック・ホームズの生まれた家』小林司、島弘之訳、新潮社、1983年、p.201.
- 31 ここでは、本作品の日本語訳である次の版を用いた：
コナン・ドイル『霧の国』龍口直太郎訳、東京創元社、1971年。
- 32 河村『コナン・ドイル 一ホームズ・SF・心霊主義』、pp.183-184.
- 33 カー『コナン・ドイル』、p.518.
- 34 ドイル『霧の国』、p.10.
- 35 コナン・ドイル『毒ガス帯』龍口直太郎訳、東京創元社、1971年、p.80.
- 36 コナン・ドイル『失われた世界』龍口直太郎訳、東京創元社、1970年、p.18.
- 37 ドイル、『失われた世界』、p.56.
- 38 龍口直太郎訳の『失われた世界』では、stegosaurusは剣竜と訳されている。
- 39 Edwin Ray Lankester, Extinct Animals, Archibald Constable & Co LTD, London, 1905, p.208.
- 40 ドイル『失われた世界』、p.107.
- 41 ドイル『毒ガス帯』、pp.11-12.
- 42 ドイル『霧の国』、pp.249.
- 43 ドイル『霧の国』、p.11.
- 44 ドイル『霧の国』、pp.38-40.
- 45 ドイル『毒ガス帯』、pp.56-57.
- 46 ドイル『毒ガス帯』、pp.81.
- 47 ドイル『コナン・ドイルの心霊学』、p.201.
- 48 藤野敬介、「コナン・ドイルの『毒ガス帯』—蒔かれた心霊主義者の種子—」、『Walpurgis 2009』、國學院大學外国语研究室外国语文化学科、2009年、p.8.
- 49 藤野「コナン・ドイルの『毒ガス帯』—蒔かれた心霊主義者の種子—」、p.17.
- 50 ドイル『霧の国』、p.14.
- 51 ドイル『霧の国』、pp.18-20.
- 52 ドイル『失われた世界』、p.78.
- 53 ドイル『失われた世界』、p.81.
- 54 ドイル『霧の国』、p.273.
- 55 ドイル『霧の国』、p.276.
- 56 ドイル、『わが思い出と冒険』、p.398.

-
- 57 カー、『コナン・ドイル』、pp.505-506.
- 58 ピアソール、『シャーロック・ホームズの生まれた家』、p.239.
- 59 ドイル、『コナン・ドイルの心霊学』、p.20.
- 60 ドイル、『毒ガス帶』、p.81.
- 61 ドイル、『霧の国』、p.43.
- 62 ドイル『霧の国』、p.8.
- 63 ドイル『霧の国』、p.252.
- 64 河村、『コナン・ドイル——ホームズ・SF・心霊主義』、p.186.
- 65 ドイル『霧の国』、p.267.
- 66 ドイル『霧の国』、p.339.
- 67 ドイル『霧の国』、15章。
- 68 ドイル『わが思い出と冒険』、p.410.
- 69 ドイル『わが思い出と冒険』、p.410.
- 70 ドイル『霧の国』、pp.346-347.
- 71 ドイル『霧の国』、p.347.
- 72 カー『コナン・ドイル』、p.519.
- 73 コナン・ドイル『マラコット深海』大西伊明訳、東京創元社、1963年.
- 74 ピアソール『シャーロック・ホームズの生まれた家』、p.271.
- 75 河村『コナン・ドイル——ホームズ・SF・心霊主義』、p.187.
- 76 河村『コナン・ドイル——ホームズ・SF・心霊主義』、p.191.